60153

教科書文庫
6
810
34-1950
0/304
49962

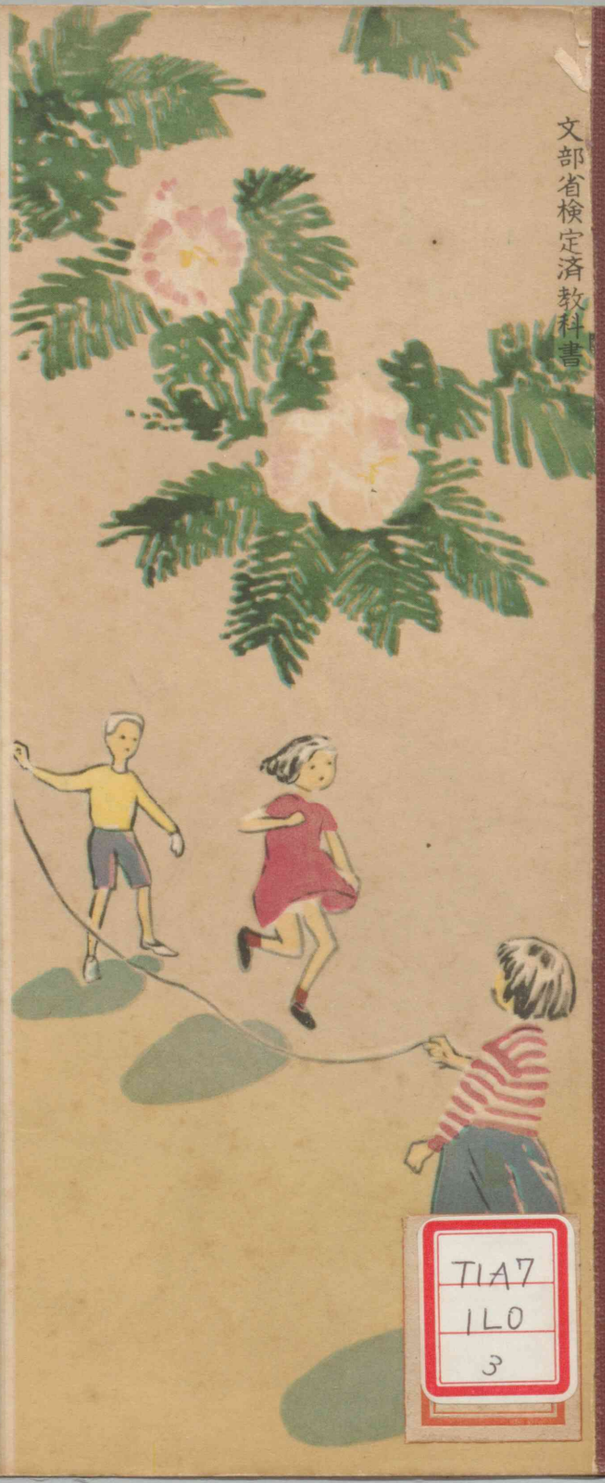
| 3 | 小国 329 |
|---|---|
| 大書 | |

重松鷹泰 監修

# ねむの木

小学国語 三年上

文部省検定済教科書



TIA7
1L0
3

昭和25年8月12日 文部省検定済 小学校国語科用

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449962

# ねむの木

## 小学国語 三年上

広島大学図書
0130449962

大阪書籍株式会社

中央図書館

広島大学図書
0130449962

もくろく


一　さくらのつつみ
(一)　さくらのつつみ……4
(二)　花びらのたび……7
(三)　ヨットを作る……23
二　朝の会
(一)　学校のおじさん……34
(二)　朝の会……43
(三)　大そうじ……49
(四)　道ばたの話……57

三　おたまじゃくし
(一)　おたまじゃくし……64
(二)　かえるのうた……76
四　ねむの木
(一)　ねむの木……79
(二)　夏休み……80
(三)　ぞうの話……107
五　私のけいこ……115
あたらしいことば
かん字

# 一　さくらのつつみ

## (一)　さくらのつつみ

ことしも、つつみの
さくらがさいた。
長いつつみに
花のトンネルができた。

つつみは、むかし、
ぼくらのおじいさんたちが
きずいたのだそうだ。

さくらのなえ木も
うえたのだそうだ。
つつみは、なんども大水を
ふせいだそうだ。

つつみは
ぼくらの通る道だ。
たのしいあそびばだ。
そうして、ひろい
きょうしつだ。

きょうも、そこで
川のけしきをしゃせいした。
先生に、むかしの話を聞いた。
うたもうたった。

風がふくと、
さくらの花びらは、
ぼくらのからだに、そっとふってくる。
つつみの道にも、川の上にも、
雪のようにひらひらとまいおちる。

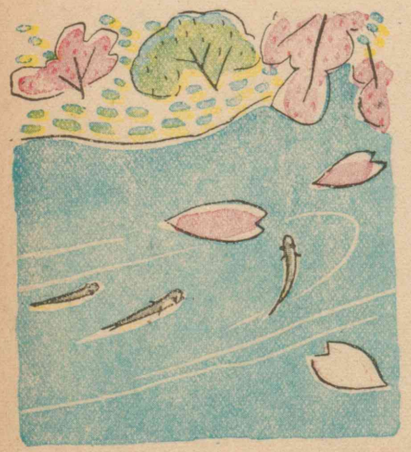
## (二) 花びらのたび

### 1

川の上にうかんださくらの花びらは、川下の方へ流れていきました。

川の水は、すきとおっていました。めだかが、すいすいとのぼってくるのにであいました。

めだかは、さくらの花びらを見つけると、めずらしそうに、そのまわりを、ぐるぐるおよぎまわりながら、通りすぎました。



川の流れが、だんだんと早くなってきました。さくらの花びらは、あがったりさがったり、くるくるまわったりしながら流れていきました。

あちらでもこちらでも、川の水がとんだりはねたりしながら、きらきらと光りました。ジャブジャブ、コボコボという水の音が、にぎやかに聞えてきました。

さくらの花びらは、音のする方へよって、

「たいへんおもしろそうですね。いったいなにを話しているのですか。」

とたずねました。

すると、元気よくとびまわっていた水が、大声で、

「ぼくは、高い高い空の雲の中で生まれました。ねずみ色の雲が、ぼくのおかあさんです。おかあさんとわかれた時には、ぼくは一つぶの雨になっていました。その時から、ぼくはとびおりることをおぼえたのです。高い空から、ひと思いにとんでおりるほど、気持のいいことはありません。ザアーといってとびおりたところは、大きなかしのはの上でした。かしのはから、すぐ下

の岩の上へとびました。岩から、この川上の谷川へとびこんだのです。それからというものは、ずっとこうしてとびつづけています。」

といいました。

こんどは、きれいな水がしずかに話しだしました。

「私も雨になって、空から畑の上におりてきましたが、それは、ほんのなみだほどのしずくでした。それでも、畑の土はたいへんよろこんで、私たちをむかえてくれました。それからは、長い間、土の中でくらしてきました。私は、土のすきまから下の方へはいっていきました。土の中はくらいところですが、たいへんすずしくていい気持です。かたい岩の中を通る時は、たいへんこまりました。とちゅうで、いろいろなものにであいましたが、中でも木や草の根は、私たちが通ると、それはそれはたいへんなよろこびかたでした。私たちの友だちの中には、根のやどにとまっていったものも、たくさんいます。こうして土の中を通っている間に、私のからだのよごれ

はすっかりとれて、こんなに美しくなることができました。」

これを聞いていたとなりの水が、「ぼくも土の中にいたものですが、近くにいどがあったので、その中で休んでいました。すると、ふいに下の方から、強いいきおいでおしあげられました。やがて、暗いくだの中を、友だちとおしあいながら、上の方へのぼっていきました。そうして、とうとうポンプの口か

らはきだされてしまったのです。」といいました。

## 2

川の流れが早くなってきました。

とつぜん、ドーッという大きな音がしました。それは、これまでに聞いたこともないような、おそろしい音でした。あっというまに、さくらの花びらは、川のそこへつきおとされてしまいました。花びらは目まいがして、気がとおくなってしまうのかと思いました。

すると、だれかがプクプクとわらいました。それは白い水のあわでした。

「さくらの花びらさんではありませんか。どうして、そんなに青いかおをしているのですか。」

といいました。

花びらは、ふるえ声になって、

「ここはいったいどこですか。」

とたずねました。

「ここはたきです。こんなことにびっくりしていては、とても、川のたびはできませんよ。もっともっと、大きなたきがありますからね。ぼくがここまでくるとちゅうに、大きなダムがありました。五十メートルもある、高いダ



ムの上から、下へすべりおちた時は、ほんとうに、びっくりしました。それだけではありません。また発電所を通った時は、大きなきかいが、ゴウゴウとうなっていました。ぼくは、その下も通りぬけましたが、耳がつぶれてしまいそうでしたよ。」

といって、水のあわはわらいました。

## 3

川にも、夜がきました。

さくらの花びらは、川岸の草のかげに休むことにしました。

しずかな夜でした。

ポトンという音がしました。小さなやさしい音です。また、ポトンといいました。

花びらはじっと耳をすまして、その音を聞いていると、花びらのかたに、つめたいものが、ぽたりとおちてきました。ひやっとして上をあおぐと、すぐ目の前に、夜つゆにぬれた草が、かすかにゆれていました。

「あ、こんなところに川の赤ちゃん。」

と、花びらは思わずさけびました。

## 4

夜の風がふいできて、川に小さな波をたてると、花びらもゆられて流れだしました。川の水は、夜でもいそがしそうに、さらさらと流れていきます。どのくらい流れていったのか、暗くて花びらにはわかりませんでしたが、そのうち、どこからか土のにおいがしてきました。チョロチョロという音も聞えてきます。

花びらは音のしている方にむかって、

「あなたがたは、たんぼの水さんでしょう。」

と話しかけました。

たんぼの水は、びっくりしていいました。

「ええ、そのとおりですが、この暗いのに、どうしてそれがわかりましたか。」

「においでわかったのです。あたたかい土のにおいがします。なえのにおいもしますね。」

と、花びらはいいました。



「よくわかりましたね。私たちはお百しょうさんといっしょになって、いねのなえをそだててきました。はたらきものの牛さんと、どろだらけになって、はたらいたこともあります。そのために、すっかり土のにおいがするようになったのです。でも役にたってよかったと思います。」

たんぼの水は、うれしそうにいいました。

## 5

東の空が、だんだんあかるくなってきました。川岸には、大きなたてものが見えだしました。高いえんとつも立っています。川はばも、前よりは広くなっていました。

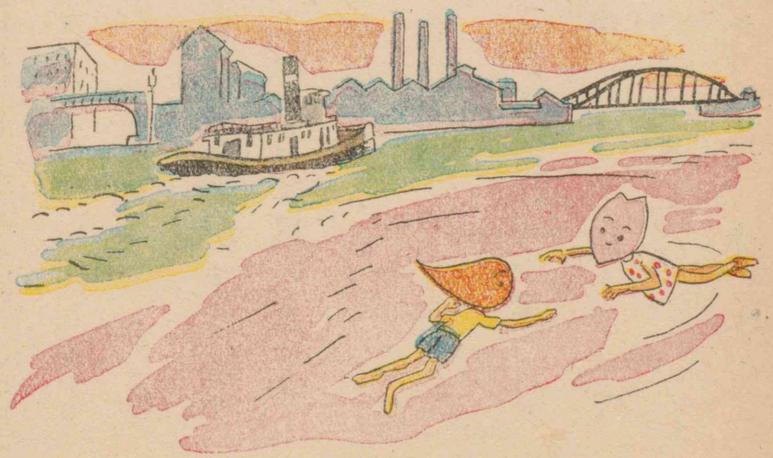
ふと見ると、さくらの花びらのまわりには、赤い水がひ

ろがって流れていました。花びらはふしぎに思って、赤い水に

「ここはどこでしょうか。」

とたずねました。赤い水は、

「ここは川口の町です。私は町のそめもの工場ではたらいていた水です。赤いぬのは、みんな私たちがそめました。そめもの工場には、私たちの友だちがたくさんいて、はたらいています。友だちの中には、赤むらさきだ





の、黄みどりだの、みどり青だの、そのほか、目のさめるような美しい色のものもいます。おやおや、あなたのからだも、すっかり赤くそまってしまいました。」

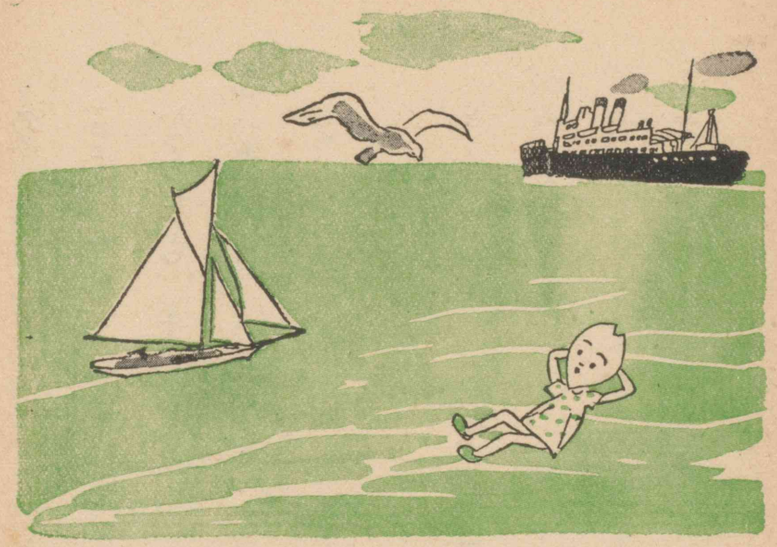
赤い水はそういって、にっこりしました。

## 6

さくらの花びらは、朝日の光にてらされて、うす赤くかがやきました。

大きな波がよせてくるたびに、川岸の水は、ジャブン、ジャブンとはしゃぎました。

ぷんと、しおのかおりがしてきました。



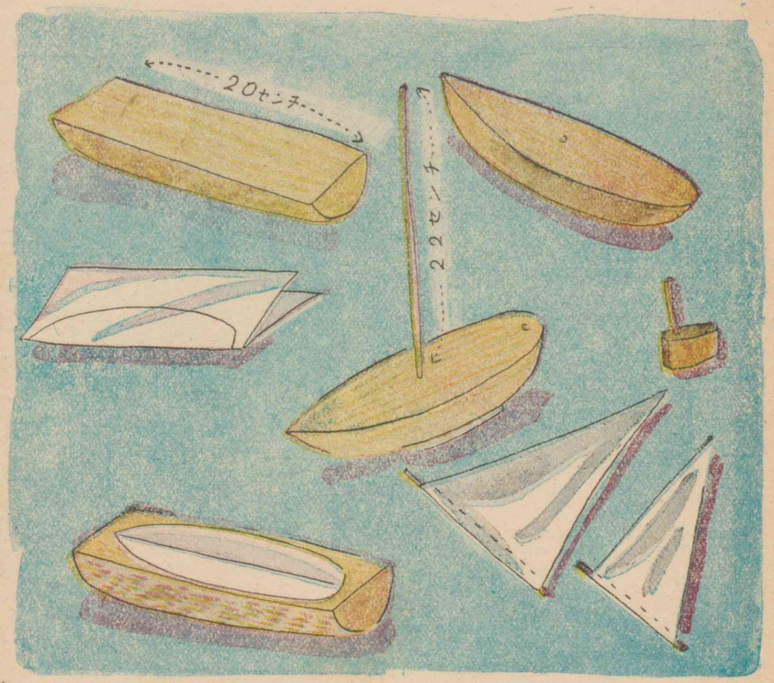
あ、海が見えます。
青い青い海です。
広い広い海です。
おきを汽船が通ります。
ヨットが、風を切ってすすんでいきます。
白いほが、きらりと光ります。
ヨットをおっていくかもめも、まっ白です。
さくらの花びらは、波にゆらりとのりました。



## (三) ヨットを作る

### 1

ぼくは、波を切って走るヨットがだいすきです。
この前の日ようでした。ぼくは、ヨットを作ってみようとしました。
はじめに、ヨットの作り方を考えて、それを、ずにかきました。
物おきへ行って、ヨットにする木をさがしましたが、いい木が見つかりませんでした。
そこへおとうさんがやってきて、
「なにをしているのだ。」




とおっしゃったので、

「ヨットを作る木をさがしているのです。」

というと、おとうさんは、

「これがいいだろう。」

といって、まるいたきぎの太いのを一本、持ってきてくださいました。

ぼくは、これが船になるかしらと思いました



が、ふと、いい考えがうかびました。ずの長さどおりに、のこぎりで、まるいたきぎを二十センチの長さに切りました。それを、こんどはたてに半分にわりました。切り口のひらたい方をヨットのかんぱんにして、まるい方を船のそこにする考えです。

かんぱんになるひらたい方に、船を上から見た形を、えんぴつでかきました。船の先の方をほそく、うしろの方を少しまるくかきました。船の外がわのせんが右左同じようにかけません。なんどもかきなおしましたけれども、えんぴつのせんがなん本にもなるばかりです。

ぼくがこまっていると、おとうさんは、

「船の両がわを同じようにしないと、船がかたむいてしまうよ。どうしたらいいかな。そこがくふうのしどころだよ。」

とおっしゃいました。

ぼくは紙ざいくで、右左同じように切りぬいたことを思いだしました。そこで、紙をとってきて、それをまん中から二つにおってかさね、そのおれめをまん中にして、船のかた方のせんをかきました。それから、そのせんの上をはさみで切りぬきました。紙をひろげてみると、右左同じ船の形ができました。



その紙をかんぱんになる方にはりつけて、木の横がわをけずりました。

かんぱんの上もけずって、でこぼこをなおしました。

こんどは、ほばしらを立てることにしました。ほばしらは、竹のはしをけずってまるくしました。かんぱんの中ほどに、きりであなをあけ、ほばしらを立てました。

これで、だいぶんヨットらしくなってきました。

早くほをはって、水の上を走らせてみたくなりました。

おかあさんに、ほにする白いぬのをもらいました。ぬのを、大きな三角と小さな三角とに切りました。そうして、ぬのの下に、ほそい竹を糸でぬいつけました。ぬいつけるのが、なかなかむずかしいので、おかあさんに手つだっていただきました。

いよいよ、ほばしらに、ほをとりつけることにしました。大きい方はほばしらに、小さい方は、ほばしらから船の先にはった糸にとりつけました。そうして、どちらも右左にうごくようにしました。

これですっかりヨットらしくなったので、ぼくは、



「できた、できた。ヨットができた。」

といって、かけだそうとすると、おとうさんが、

「おや、おや、かじのない船かね。」

とおっしゃいました。

あまりうれしかったので、かじをつけることをわすれていたのです。

さっそくかじのとりつけにかかりました。

うすい板にかじの形をかき、小刀で切りとりました。そうして、その板にあなをあけ、ほそいかじぼうを通し、そのかじぼうを、船のうしろのそこにとりつけて、かじがうごくようにしました。

いよいよできあがりましたので、たらいに水を入れて、うかべてみました。すると、ヨットは横にかたむいて、ほが水につきそうになりました。

おとうさんにこのわけをお聞きすると、

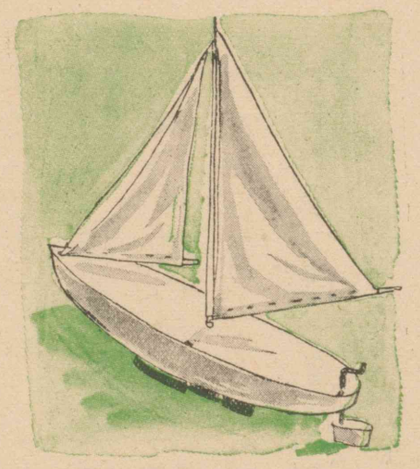
「それは、船のそこがまるくて、船のどちらかにおもいかるいがあるのだよ。船のそこにおもりをつけてごらん。」

とおっしゃって、てつのぼうの切れはしをくださいました。てつのぼうをとりつけてうかべると、こんどはかたむきません。

ぼくは、これですっかりあんしんしました。

かんぱんを青、船のそこを赤いエナメルでぬりました。





そうして、ほが白いので、「かもめ号」という名をつけました。

## 2

つぎの日、エナメルがすっかりかわいたので、ぼくは、「かもめ号」を学校へ持っていきました。

友だちがみんなあつまってきました。

「いいな。ちょっとかして。」

「どこで買ったの。」

などといって、わいわいいいました。

ぼくが、
「買ったのではないよ。ぼくが
作ったのだ。」
というと、みんなは、
「うまいなあ。」
といって、おどろきました。
学校の中庭の池に、「かもめ号」を
うかべました。
「かもめ号」は、白いほを池の水に
うつして、ゆったりとうかびました。
かじをきめ、風のむきを見て、手をはなしました。

その時、ちょうど風がふいてきたので、「かもめ号」は、池
の上をすべるようにして走りだしました。
見ていた友だちは、いっせいに手をたたきました。
先生も、まどをあけて、にこにこしながら見ていらっしゃ
いました。
ぼくは、うれしくてたまりませんでした。

# 二　朝の会

## (一)　学校のおじさん

1

私の学校のおじさんは、よく太っていらっしゃいます。年はもう六十に近いそうですが、顔が赤くて元気ですから、としよりには見えません。私のおとうさんの子どものころから、学校の小使さんをしていらっしゃるそうです。

たいそう大きな声を出す人です。私たちが朝学校にきて、

「おじさん、おはよう。」

というと、おじさんはにこにこしながら、



「おはよう。」

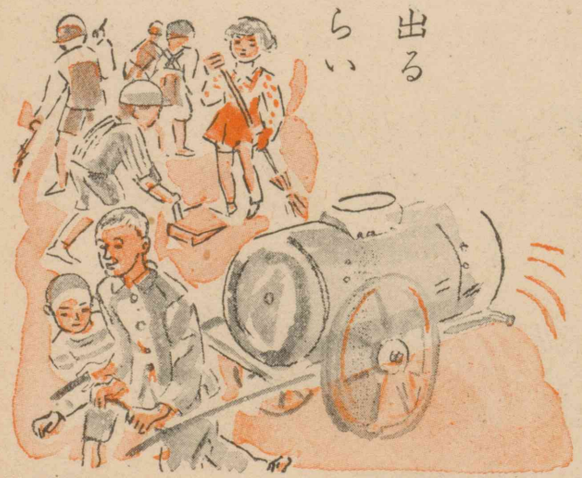
と、大きな声でへんじをなさいます。

2

私たちが、朝、運動場のそうじに出るころになると、運動場はもう半分ぐらいきれいになっています。これは、おじさんが、毎朝早くから、そうじをしていてくださるからです。

それだけではありません。

毎年、夏の朝、広い運動場に



水まき車をひいて、水をまいてくださるのもおじさんです。

冬がきて、庭の木のはがおちるころになると、おじさんは赤い顔をいっそう赤くして、毎日、なんどもおちばをはきあつめられます。

中庭の池も、おじさんがひとりで、ほられたのだそうです。前のつき山も、おじさんがきずかれたのだそうです。

そのつき山は、私たちの町の北にそびえている、朝日山の形に作ってあります。中にあるえだぶりのいい松の木も、おじさんが朝日山から引いてきて、

うえられたものだそうです。

池は、朝日山のすがたをうつして、いつもあおあおと水をたたえているすがたに作ってあります。池には、金魚が二三十ぴきもはなしてあります。この金魚は、おじさんがかわいがっていられるものです。私たちが金魚にさわりでもすると、おじさんは、あの大きな声でとめられます。

また、私たちの学校の校門には、二宮金次郎のぞうが立っていますが、これも、おじさんがセメントで作られたものです。できた時は、色がきれいにぬってあったそうです。

校門からげんかんまでの道の両がわは、ちゃの木が、いけがきのようにして、うえてあります。

毎年、白いかわいい花がさき、やわらかいしんめがにおいます。

このちゃの木も、おじさんが、たねをまいてそだてられたのだそうです。これは、私たちのおひるべんとうのおちゃにいれるはをとるために、思いつかれたということです。

中庭の水は、運動場のすみにあるみぞに、流れておちるようになっています。そこに小さな水車がかかっています。水車小屋には、かわいい米つきのうすが、すえてあります。



この水車も、おじさんが作られたものです。私たちの村にも、むかしは、水車小屋がところどころにあって、米をついていたそうですが、そののち、せい米所ができてからは、すっかりなくなってしまいました。

ほんとうの水車を見に行くのには、ずっとはなれた山おくへ、行かなければなりません。これでは水車の勉強にふべんだといって、おじさんが作ってくださったのです。

私たちの学校では、また、にわとりや、うさぎや、やぎをかっています。

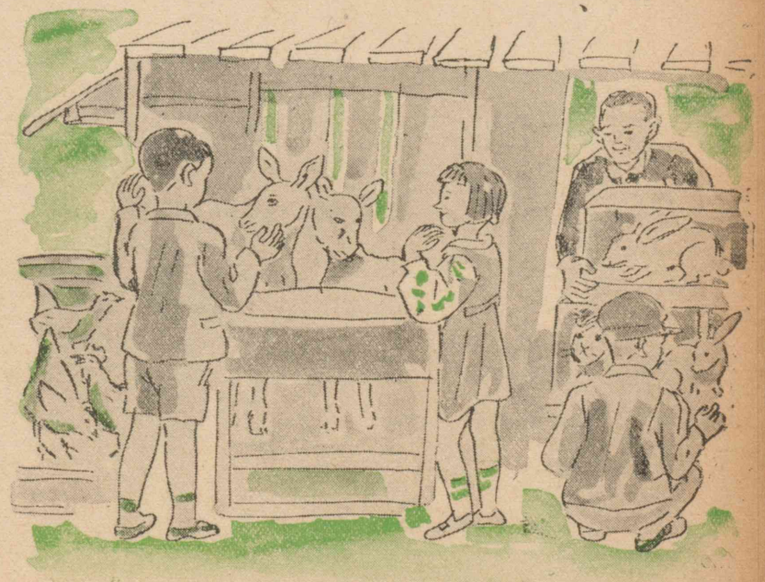
三年生から、組でそのせわをすることになっていますが、おじさんも、いっしょになって手つだってくださいます。

先生も、

「かい方で、わからないことがあったら、おじさんに聞いてごらん。」

とおっしゃいます。

おじさんにたずねに行くと、おじさんは、いつもていねいに、おもしろく話してくださいます。





3

おじさんは、ひまさえあったら、学校中のかみくずをひろって、それをあつめ、かみくずやさんに売って、お金にかえられます。たまったお金でつぎつぎと学校に役だつものをお作りになるのです。

あとになって、先生からお聞きした話ですが、おじさんには、もと、おばさんと、ひとりの男の子とがあったそうです。はじめのころは、おばさんといっしょに小使さんをしていらっしゃいましたが、まもなく、おばさんがなくなられました。それからは、ずっと、おじさんが、子どもさんを大きくしてこられました。その子どもさんが、小学校

の二年生の時、なくなったのです。おじさんは、たいへんおかなしみになりましたが、だんだん元気をとりもどして、毎年子どもさんのなくなった日に、なにか一つ、学校のためにいいことをしようと思いつき、それをしては、じぶんをなぐさめるようになさったのだそうです。

それで、おじさんが、私たちをじぶんの子どものように、かわいがってくださるわけもわかります。

もうすぐ、子どもさんのなくなった日が来るそうです。おじさんの頭の中には、なにかいい考えがうかんでいるにちがいありません。



## (二) 朝の会

### 1 朝の会

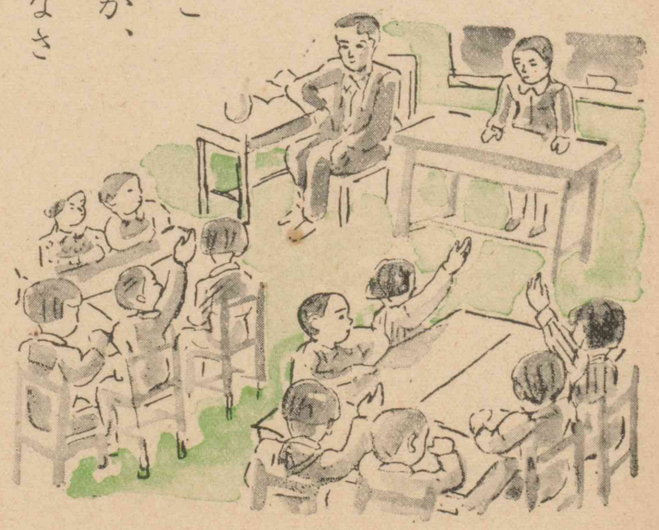
私たちの学級では、三年生のはじめから、学級日記をかくことにしました。学校であったおもなことについて、くわしくかきとめることにしています。

朝の会　　——学級日記から——

きょうは、はじめに先生がお話になりました。

先生「うれしいことをお話します。学校のおじさんがしらせてくださったのです。それは、きよしくんが、いつもべんじょのげたをそろえているということです。

これは、ちょっとしたことですが、なかなかできないことです。どんな小さなことでも、なにかみんなのために役だついいことをしたいものですね。おじさんは、きよしくんのことをかんしんしていましたが、きよしくんだけでなく、みなさんの中にも、これまでにいいことをした人がいると思います。だれか、そういう人を見かけませんか。」





きよしくん「よしおくんは、よく紙くずをひろっています。」

あいこさん「まさこさんは、かびんの花の水を、いつもかえていらっしゃいます。」

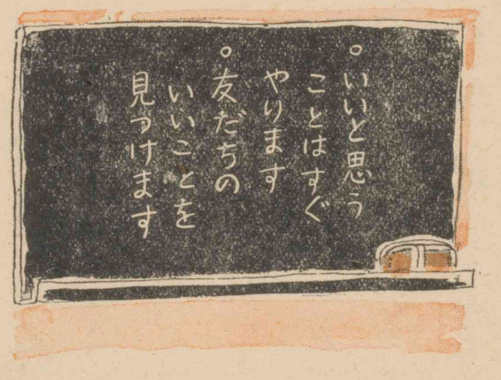
まさこさん「あいこさんは、こくばんふきがよごれると、いつもきれいにはたいていらっしゃいます。」

すすむくん「としこさんは、ぞうきんがけのぞうきんがみだれるのを、きちんとそろえていらっしゃいました。」

まことくん「すすむくんは、べんじょの戸があいているのを、しめてまわっていました。」

先生「聞いてみると、めいめい見えないところで、いいことをしていますね。いいと思うことは、まだまだあ

ると思います。いいと思うことは、すぐやりましょう。それといっしょに、人のいいことも、どしどし見つけてあげることにしましょう」。




そうして、先生は、今までの話をまとめて、上のように、こくばんにお書きになりました。

## 2 しごとの係

きょうは、組のしごとをてわけをしてすることについてそうだんをしました。先生から、しごとに手おちのないように係をきめて、てわけをするといいというお話がありました。そうして、「係」という字を、おしえていただきました。

しごとの係について、いろいろないけんが出ましたが、それぞれなりたい係をさがして、はいることにきまりました。

おわりに、係のものが集まって、どんなしごとをするかを、いろいろとそうだんしました。そうしてまとまったことを、記ろくの係に知らせました。

記ろく係は、それをまとめて、けいじ板に書きました。

| 係 | としごと |
| --- | --- |
| せいとん係 | つくえ、こしかけのせいとん<br>げたばこのせいとん<br>まどのあけしめ |
| 記ろく係 | 朝の会、かえりの会の記ろく<br>学級日記を書く<br>けいじ板の記ろく |
| かざり係 | 花のとりかえ、水のいれかえ<br>えや、しゃしんのはりかえ |
| 運動係 | ボールのしまつ<br>運動ようぐの出し入れ |
| 学習係 | 学級の本のかし出し<br>読みたい本のせわ<br>勉強のよう い |



## (三) 大そうじ

きょうは日ようで、おとうさんもお休みですから、家の大そうじをすることになりました。

おとうさんは、さぎょうふくをきて、ぼうしをかぶり、おかあさんは、もんぺをはいて、てぬぐいをかぶられました。ぼくは、うんどうぼうをかぶりました。妹もぼうしをかぶりました。おかあさんは、みんなにマスクをわたしてくださいました。

だいどころからはじめました。ぼくと妹は、おかあさん

のおさしずで、台所の道具を外へ出しました。
台所には、ずいぶんたくさんの道具があるものだと思いました。
妹は、ぼくに、
「にいさん、これなに。」
といって、一つ一つをたずねましたが、ぼくにもわからないものが、たくさんありました。そんな時は、おかあさんがおしえてくださいました。
道具のほこりをはらい、水できれいにあらってから、むしろの上にならべて、日にかわかしました。日にほすと、日の光でぱいきんがしぬのだそうです。

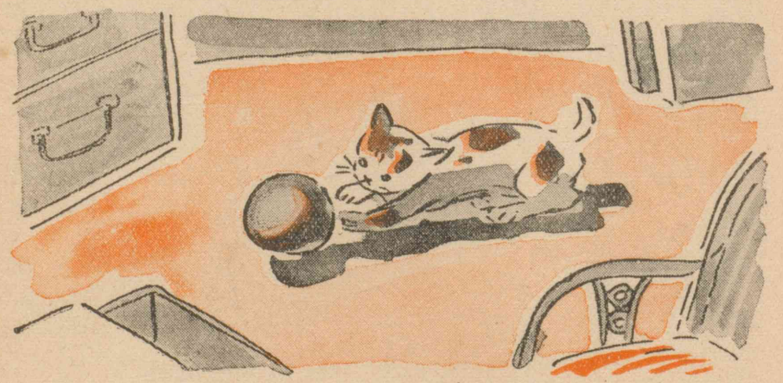


たたみを持ちだす役は、おとうさんでしたが、たたみがたいへん重そうでしたので、おかあさんとぼくとが手つだいました。
ゆか板をめくると、ぷんとかびくさいにおいがしてきました。おとうさんは、ほうきを持って、ゆかの下へはいっていかれましたが、しばらくして、

「おーい、ようこ。ゴムまりがあったよ。」
といって、かおをゆかの上にお出しになりました。見ると、おとうさんのかおが、くものすだらけでしたので、みんな大わらいをしました。妹は、なくなったゴムまりが出てきたので、大よろこびでつきはじめましたが、
「あら、へんよ。あがらないわ。」
といって、しょげた声を出しました。しらべてみると、空気がぬけていました。おかあさんが、
「日にほしておきなさいよ。」
とおっしゃいましたので、妹はゴムまりを日のあたるところにおきました。



十二時のサイレンがなったので、ごはんにしました。庭にひろげたむしろの上でたべました。まるで、えんそくにでも行って、おべんとうをたべているような気持でした。
マリが妹のゴムまりを見つけて、じゃれはじめました。妹は、
「マリ、マリ、わたしのゴムまりよ。」
といって取りかえしました。そうして、
「あら、こんなにふくれている。」
と、うれしそうにいいました。



おとうさんは、ぼくたちが休んでいる間に、町のえいせい係の家へ行って、ディー・ディー・ティーのこなとポンプとを持っていらっしゃいました。

午後からは、たたみたたきをしました。たたみをたたくたびに、たくさんのほこりが、まいあがりました。ぼくは、おかあさんが毎日そうじをなさるのに、どうしてこんなにほこりが出るのかしらと思いました。

たたみを入れおわると、外に出した道具をかたづけました。たんすや、つくえや、本ばこは、もとあった場所とちがう場所におきかえました。そのために、へやの中が、すっかりあたらしくかわったようになりました。



こんどは、おとうさんが、さっきのポンプを持ってきて、白いこなを入れ、それをたたみのすきまやおし入れの中に、シュッシュッとまかれました。ふとんやきものにもまかれました。家の中は、雪がふったように白くなりました。

すると、おかあさんが、

「まだ、わすれているところがありますよ。」

とおっしゃったので、おとうさん

はすぐ思いだしたように、

「ああ、そうだった。まだ安心できないね。」

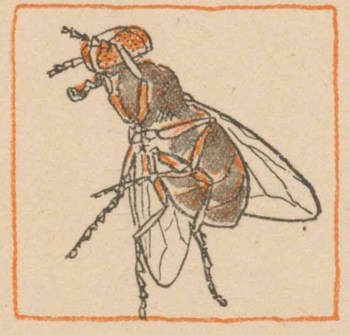
といいながら、こんどはバケツを持ってきて水を入れ、その中に、せきゆにゅうざいを入れられました。まぜると白いあわが出ました。それをべんじょや下水にふりかけました。かけおわると、おとうさんは、バケツを水であらいながら、

「これでほんとうに安心だよ。」

とおっしゃいました。



## (四) 道ばたの話



はえのぶんきちは、いまにもたおれそうになって、道ばたによろよろとしゃがみこみました。そこへ、かのかーきちが、とぼとぼとやってきました。

かーきち「おや、ぶんきちさんではありませんか。どうかなさいましたか。」

ぶんきち「かーきちさんでしたか。たいへんなめにあいましたよ。あなたも顔色がわるいようですが。」

かーきち「ええ、わたくしもひどいめにあってきました。」

そこへ、のみのぴょんすけが、びっこをひきながらあらわれました。

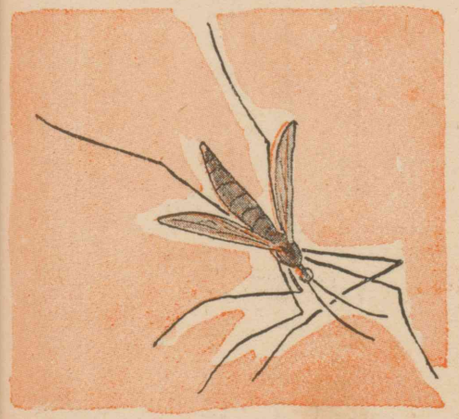
ぶんきち「ぴょんすけさんがやってきましたよ。もしもし、ぴょんすけさん。」

ぴょんすけ「おや、これはおそろいで、どうかしましたか。」

かーきち「あなたはびっこをひいておられますが、どうしました。」

ぴょんすけ「どうもこうもあるものですか。あんなおそろしいことといったらありませんよ。」

そこで、おたがいに、これまであったことを、かわるがわる話しだしました。

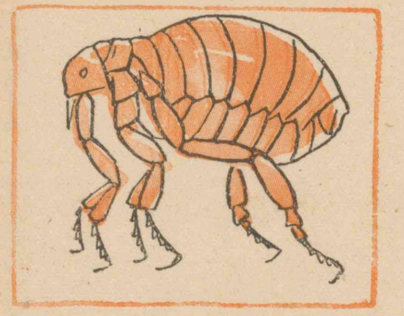




ぶんきち「このごろの人間は、たいそうおそろしいものを持っていて、少しも、ゆだんができません。私はもともと、ごみばこの中で生まれ、そこがすみかなんですが、私のなかまには、牛や、馬などの小屋の中にも、べんじょの中にもすんでいるものがあります。きのうのことでした。とつぜん、人間に、へんなにおいの水をかけられました。すると、急に目がまわり、いきぐるしくなってたおれてしまったのです。ふと気がつくと、なかまは、みんな気をうしなっていました。　それからどうしてここまでにげてきたのかわかりませんが、まだ、その

においがからだについていて、いまでもいきがつまりそうなんですよ。」

ぴょんすけ「私は、たたみの下のごみの中で生まれました。そうして、ごみをたべて大きくなってきましたが、この間、人間が、たたみのごみを、すっかりはらいおとしてしまったからたまりません。私たちのすも、みんなはらいおとされてしまいました。私たちはびっくりして外へとび出しましたが、人間に見つかってはたいへんです。私は、おし入れのふとんの中にしのびこんで、じっとかくれて





いました。ところが、また人間がやってきて、こんどは、白いこなをふりかけるのです。そのこなのにおいが、またたいへん強くて、目にまでしみこんできます。もちろん、目はあけられないし、それにだんだんいきが苦しくなってきました。私は、もうだめだと思ってとびおりました。その時足をくじいてしまったのです。」

かーきち「私はたまり水の中で生まれました。そうして、きのうまで下水の近くにすんでいました。友だちの中には、ぶんきちさんの家の近くにすんでいるものもあります。私もぶんきちさんと同じように、

へんなにおいの水をかけられたのです。はねはぬれてとべなくなるし、そのにおいがするたびに、むねが苦しくなるばかりです。かわいそうに、子どものぼうふらは、みんないきがつまってしまいました。」

ぶんきち「こうなると、私のすきなたべものも、なめることができません。せきりきんも、チフスきんも、運ぶことができなくなりました。」

かーきち「私もこれから、人間の血をすうことができなくなりました。私のなかまのはまだらかが、一ばんこまっているでしょう。なにしろ、マラリアきんが



運べなくなりますからね。」

びょんすけ「私も、人間のおいしい血がすえなくなります。それから、人間にねつ病をうつすこともできなくなりました。それに、このたいせつな足をくじいてしまったのでは、どこへもとんでいけません。こまったことになりましたよ。」

ぶんきち、かーきち、びょんすけは、だんだんと力がなくなって、とうとう動けなくなってしまいました。

## 三　おたまじゃくし

### (一)　おたまじゃくし

一の場面

かえるのうたが
聞えてくるよ。
ガガガガ
ケケケケケケケ
クワ　クワ　クワ

かえるのうたをうたいながら、学校のげんかん前に、子どもたちがならんでいる。

先生が出ていらっしゃる。

子どもたち「先生、おはようございます。」

先　生「おはよう。みんな集まりましたか。」

子どもたち「はい。」

先　生「それでは、今から、きのうきめたように、おたまじゃくしをしらべに行きましょう。」

子どもたち「うれしいうれしい。」「早く行きたいなあ。」

先生を先頭にして、子どもたちは門を出る。

二の場面

子ども二「いい天気だなあ。この前は、まださむかったのに。」

子ども三「あの時は、かえるのたまごを取りに行ったのだわ。」

先生「そのたまごをおぼえていますか。」

子どもたち「はい。」「はい。」

子ども四「かんてんのようなものでした。」

子ども五「ぬるぬるした、まるいかたまりが、たくさん集まって、水にういていました。」

子ども六「たまごのつぶの中には、黒いてんがありました。」

先生「よくおぼえていました。あのかんてんのようなものは、なんのためにあるのか、知っていますか。」

子ども六「たまごを、まもるためです。」

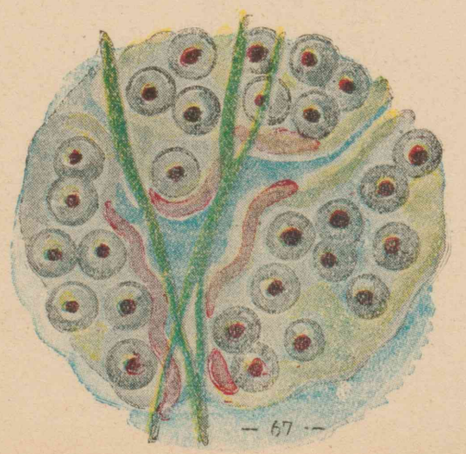
先生「そうでしたね。」

きよし「先生、ぼくは、あの時取ったたまごを、家でかっています。」

先生「ほほう、それはかんしんだね。どんなにかわりましたか。」

きよし「はい。ぼくは、こんなに日記に書いています。」

先生「それではみんなに読んであげてください。」



きよしくん、読みはじめる。

四月十日　金よう　くもり

かえるのたまごを持って帰って、金魚ばちに入れる。かえるのたまごはかんてんのようだ。一つ一つの中に黒いまるいものがある。これがおたまじゃくしになるのだと思う。

四月十九日　日よう　晴

黒いものが細長くなってきた。よく見ると、もうおたまじゃくしの形になって、頭の方が太く、おが細い。まだまるいのもある。



四月三十日　木よう　晴

おたまじゃくしが出てきた。かえったばかりだから、かんてんにひっついて動かない。

五月六日　水よう　くもり

前にかえったおたまじゃくしは、少し大きくなって、ゆらゆら動いている。長さは四センチばかり。かえったばかりのもいる。かんてんのようなものがくずれはじめた。

きよし「ぼくは、ここまで書きました。」

先生「ねっしんによく書きましたね。あとをしらべて、つづけてごらん。」

きよし「はい。かえるになるまで、ずっとつづけます。」

先生、水田のところを指さして、

先　生「みなさん、よく見てごらん。」

みんなめいめい声をたてる。

「いた、いた。」「おたまじゃくしだ。」

「おたまじゃくしがいるわ。」

きよし「ぼくのより、ずっと大きくなっている。」

子ども五「わあい、おたまじゃくしがにげていくよ。」

子ども一「先生、わかったことがあります。」

先　生「なんですか。」

子ども一「おたまじゃくしも、こいやふなのように、口をぱくぱくさせています。」

先　生「いいところに気がつきましたね。」

子ども四「先生、おたまじゃくしは、にごった水がすきですね。」

子ども三「先生、おたまじゃくしを取ってもいいですか。」

先　生「いいけれども、水の中におちこまないように気をつけなさいよ。」

子どもたち、声をあげてうれしそうに、おたまじゃくしをすくいはじめる。

## 三の場面

あいこさんの家。土ようの午後。あいこさんが、弟のかずおくんと、へやの中で、金魚ばちのおたまじゃくしを見ている。

かずお「ねえさん、おたまじゃくしが、へんなことをしているよ。」

あいこ「あら、ほんとう。あわをふきだしたり、すいこんだりしているわ。」

おかあさん、へやの中へはいっていらっしゃる。

かずお「おかあさん。おたまじゃくしは、なにをしているの。」

おかあさん「さあ、なにをしているのでしょうね。」

あいこ「あ、わかった。私たちと同じように、水の中でい



きをしているのよ。」

かずお「おやおや、あんなことをしている。おもしろい、おもしろい。もぐった、もぐった。」

あいこ「かわいいわね。かずおちゃん、いっしょにかってやりましょうね。」

かずお「うん。早く大きくなったらいいのになあ。」

おかあさん「いつごろ、かえるにな

るでしょう。かえるになるまで、だいじにそだてましょうね。」

かずお「かえるになったら、はちがせまくなるよ。」

あいこ「そうしたら、お池にはなしてやりましょう。」

おかあさん「そうね、おかあさんがえるが、まっているでしょうよ。」

## 四の場面

十日ほどたったある日。あいこさんの家のえんがわ。

あいこ「おかあさん、いらっしゃい。かずおちゃんも早く。」

おかあさん「なんですか。そんなに大きな声を出して。」



あいこ「おたまじゃくしに後足が出ているわ。」

おかあさん「あら　ほんとうにね。かわいい足ですこと。」

かずお「ねえさん。こっちのおたまじゃくしにも、足がはえているよ。」

おかあさん「かえるになるのも、もうすぐよ。つづけてしらべてごらんなさい。」

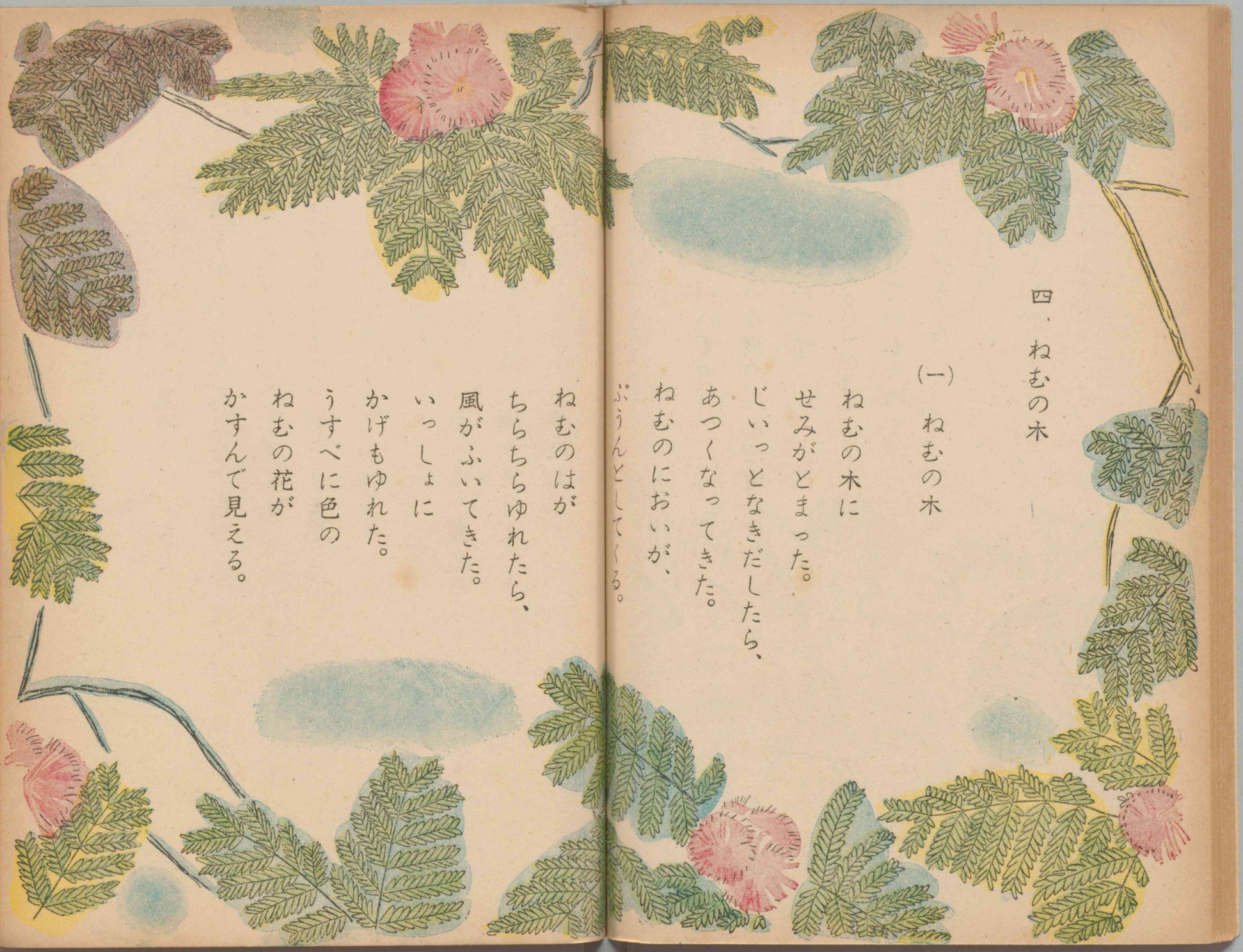
あいこ「はい、そうして、日記に書くことにします。」

あいこさんとかずおくんとは、うれしそうに、かえるのうたをうたう。

## (二) かえるのうた

かえるは、なにがたのしいのでしょう。
かえるは、なぜなくのだろう。
かえるの口は、
なぜあんなに大きいのだろう。
天気のいい日、
かえるは、えだの上で、
かいかいとないています。
えだがえるといって、
声がとても美しいのです。

あまがえるともいいます。
かえるのないている夜のたんぼ道
は、さびしいものです。
かえるは、しかしどこかこっけいで、
かわいい顔をしているものです。
目をぱちくりかえす。
足で足をこする。
のどをぴくぴくさせる。
おなかは白くふくれている。



## 四．ねむの木

### (一) ねむの木

ねむの木に
せみがとまった。
じいっとなきだしたら、
あつくなってきた。
ねむのにおいが、
ぷうんとしてくる。

ねむのはが
ちらちらゆれたら、
風がふいてきた。
いっしょに
かげもゆれた。
うすべに色の
ねむの花が
かすんで見える。

## (二) 夏休み

### 1 夏休みのくらし

きょうから、夏休みになったので、ぼくは毎日のくらしの計画をたてた。それをつぎのようにまとめた。夏休み中、しっかりまもりとおそうと思う。

○

午前六時　おきる　顔をあらう　れい水まさつ
七時　庭のそうじ
　　朝ごはん



八時—十時　学習
十時—十一時　お手つだいとあそび
正午　ひるごはん
午後一時—二時　水およぎ　ひるね
二時—四時　すきな学習
四時—六時　お手つだいとあそび
　　畑の水やり　庭の水まき
六時　夕ごはん
七時—八時　夕すずみ
八時—八時半　日記をつける
八時半　ねる

## 2　うさぎ

夕がた、ぼくは、うさぎに草をやろうと思って、うさぎ小屋に行った。うさぎがいない。小屋の戸が半分ばかりあいている。

「しまった。」と思って、そのへんをさがしてみたが、見つからない。そのうさぎは、この夏休みの間、学校からあずかってきて、ぼくの家でかうことにしたものだ。これはたいへんなことになったと思って、みんなに聞いてみたが、だれも「知らない。」という。おとうさんも、

「おまえがあずかってきたのだから、せきにんがあるよ。」

とおっしゃった。



とつぜん、妹が大きな声で、

「あっ、えんの下にいる。」

といったので、えんの下を見ると、うさぎは、ゆかの下へぴょんぴょんと、とんではいってしまった。いどころがわかったので、安心したが、どうして外へつれだしたらいいかこまった。もうゆかの下は、まっ暗だ。

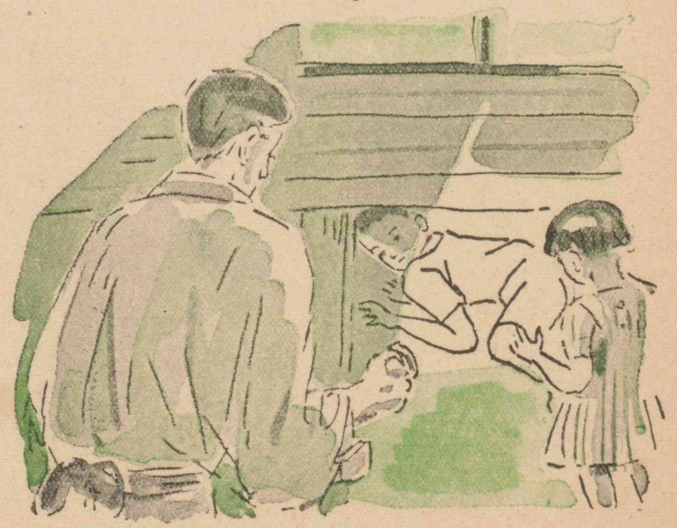
「ゆかの下へはいって、おってごらん。」

と、おとうさんがおっしゃった。

ぼくは、いやだなあと思ったが、うさぎがかわいそうになったので、四つばいになって、えんの下へ頭を入れた。

妹が後から、

「にいさん、なにか出るよ。」
と、おどかした。
ぼくは、そんなことがあるものかと思ったが、ゆかの下は、ほんとうにまっ暗で、なにも見えない。
その時、おとうさんが、後からかいちゅう電とうでてらしてくださったので、元気が出た。ぼくが、
「しいっ、しいっ。」
というと、なにかごそっと動いたような気がした。
「しいっ、しいっ。」





もう一度いうと、うさぎがとび出してきた。しめたと思って、つかもうとすると、うさぎは、するりとぬけて、また、向こうへ行ってしまった。ぼくはがっかりしたが、もう一度、
「しいっ、しいっ。」
とおった。
その時、外で、
「出た、出た。」
というみんなの声がした。
急いで外へ出ようとした時、えんの下のはしらに、頭をゴツンとうちつけた。
おとうさんは、

「きよし、えらい。よくやった。」
といって、ほめてくださった。
うさぎは、もとの小屋にはいって、なにも知らないような顔をして、草をたべていた。

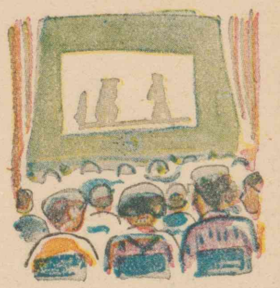
## 3 えいが

おとうさんと、町のえいがかんへ、えいがを見にいった。えいがは、「いちじくのおか」というのであった。家に帰ってから、おかあさんや妹に、その話をした。

えいがのすじがき

しゅうぞうは、小さい時に、おとうさんもおかあさんもうしなった、ひとりぼっちの子どもである。はじめに、り





はつてんにやとわれて、はたらいていたが、ひまわり学園にはいって、勉強するようになる。しゅうぞうは、からだが小さいわりに、よく太っていて、なにをしても人一ばいおそい。友だちからは、「でぶ。」「でぶ。」とよばれ、いつもばかにされる。しゅうぞうは、それでも少しもおこらない。ひまわり学園の子どもは、しゅうぞうのような、かわいそうな子どもばかりが、集まっている。ある日、しゅうぞうは、友だち五六人と、草かりに行く。草かりをしているつつみの下には、いちじくの畑がある。それを見つけた友だちは、ばらばらと、いちじくの畑へかけ

ていく。しゅうぞうも、しかたなく、その後からついていく。みんな、のどがかわいたので、いちじくをぬすんで、たべはじめる。しゅうぞうも一つを取って口にする。あまりおいしいので、思わず二つ、三つとたべてしまう。とうとう、畑のばん人に見つかってしまう。友だちはみんなにげたが、しゅうぞうは、にげおくれてつかまる。そうして、けいさつへつれていかれる。しゅうぞうは、ありのままをいってあやまったので、ゆるしてもらう。このことを聞いた、りはつてんのおばさんが、いちじくをたくさん持って、学園

をたずねてくる。みんな、大よろこびでいちじくをたべる。おばさんは、しゅうぞうに、「もうぬすみはおよし。ほしい時には、おばさんにいいなさい。」といって聞かせる。しゅうぞうは、おばさんに、「いちじくの木がほしい。」という。その後、おばさんは、いちじくの木を持ってくる。しゅうぞうは、園長さんにいって、学園のおかに、その木をうえる。園長さんもかんしんして、おか一面にいちじくの木をうえることにする。学園の子どもと先生とがいっしょになって、なん十本ものいちじくの木をうえる。しゅうぞうもにこにこして土をほる。

このえいがを見て思ったこと。

1　しゅうぞうは、のろまだが、しょうじきでよい。

2　しゅうぞうをばかにした友だちも、しゅうぞうのいい考えに、さんせいした時は、うれしかった。

3　ひまわり学園の先生は、みんなしんせつだ。

## 4　水およぎ

午後は家のものみんなそろって海へ行った。すなはまは、夏の日にてらされて、ぎらぎらとまぶしく光っていた。はだしで歩くと、足のうらがやけそうだ。

みんな海水ぎにきかえて、海にはいった。しろはなかなかはいろうとしない。首わを持って、ひっぱったが後ずさりをする。

手をはなすと、ワンワンとほえて、遠くの方へかけていった。

みんなで水のかけあいをした。

妹が、一ばん先にりくへあがった。

「およいでごらん。」

と妹がいうので、ぼくはおよごうとしたがすぐしずんでしまった。

おとうさんは、

「ははははは、ぶくぶくだな。」

といって、わらっていらっしゃる。

そこで、ぼくは、おとうさんに、

およぎをおしえてもらうことにした。

はじめに、おとうさんに、手をひいてもらった。足をばたばたやっているうちに、からだもういて、およげるような気持になってきた。すると、おとうさんは、急に手をはなされた。ぼくのからだは、また、水の中へしずんだ。その時、しおからい海の水をごくりとのんでしまった。

こんどは、おとうさんは、ぼくのはらに手をあてて、からだを横にしてくださった。そうして、

「いきをうんとすいこんで、うでをのばして、足をのばして、力をぬいて、いいかい。」

といって、そっと、はらの手をはなされた。ぼくは、ふわ

りと水の上にういた。ふしぎにしずまない。波にゆらゆらゆられながらういている。頭の上で、

「よし、よし。ういているよ。」

と、おとうさんの声がする。

いきがつまりそうになったので、足を水のそこにつけて立つと、おとうさんは、

「どうだ。うくだろう。うくようになったら、すぐおよげるよ。」

とおっしゃった。ぼくはうれしく

なって、こんどはひとりでやってみた。うく、うく。もう一どやってみたがしずまない。頭の上で、おとうさんが、

「手で水をかいてごらん。」

とおっしゃった。そのとおりにすると、少し前に進んだように思った。思いきって手で水をかくと、すうっ、すうっと前へ進む。おとうさんは、

「もうおよげるよ。こんどは、足を動かしてごらん。」

といって、およいで見せてくださった。ぼくはそのとおりにやってみたが、どうしたのか、こんどはしずんでしまった。しずむ時また水をのんだ。

ぼくはふしぎに思って、わけをたずねると、おとうさんは、

「それは、手と足とのちょうしがとれないのだよ。」
とおっしゃった。
そこで、ぼくは、おとうさんに手つだってもらって、なんかいもけいこした。だんだん手足のちょうしがとれてきて、やっとしずまないでおよげるようになった。
ぼくはうれしくなって、思わず、しろ、しろと、よんだ。しろは遠くの方からとんできた。
波うちぎわまで来ると、しばらく考えていたが、やがてジャブ、ジャブと海へはいっておよぎだした。見ると、前足で水をかき、後足をちょうしよく動かしている。ぼくは、しろのおよぎにかんしんした。



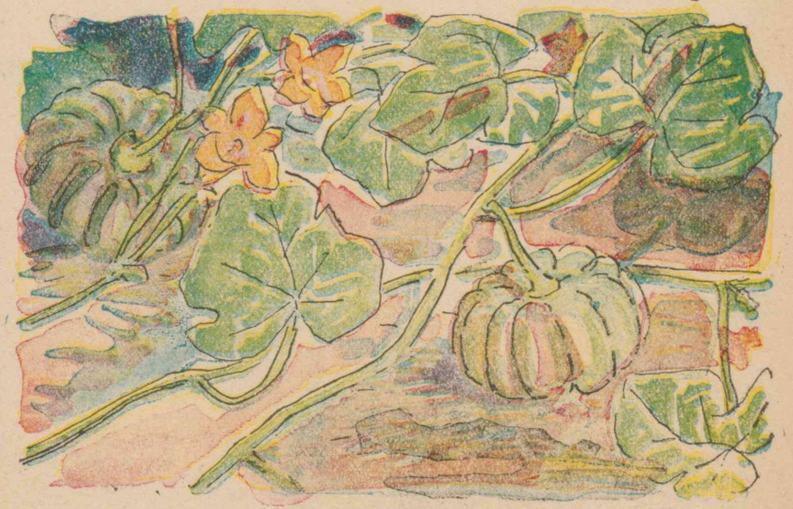
## 5 手紙

あそびに行こうと思って外へ出ると、くもっていた空からぽつぽつと雨がおちてきた。家にはいって、えんがわで雨の音を聞いていると、ふと、いなかに帰っていらっしゃる先生のことを思いだした。さっそく先生にお手紙を書くことにした。
先生お元気ですか。ぼくも元気です。いなかは、どんなようすですか。ぼくはこの間、海へ行きました。だいぶんおよげるようになりました。まだ犬かきですが、十メートルばかりおよげます。この休み中には二十メート

ルはおよげるようになりたいと思います。日にやけて、まっ黒です。

先生にたねをいただいたかぼちゃが、ぐんぐん大きくなって実が三つできました。花がつぎからつぎへと、たくさんさきます。きのう、おとうさんに、実のとまらせ方をおしえてもらいました。それは、め花のしんに、お花のかふんをつけるのです。

ぼくは、この間から、とんぼの



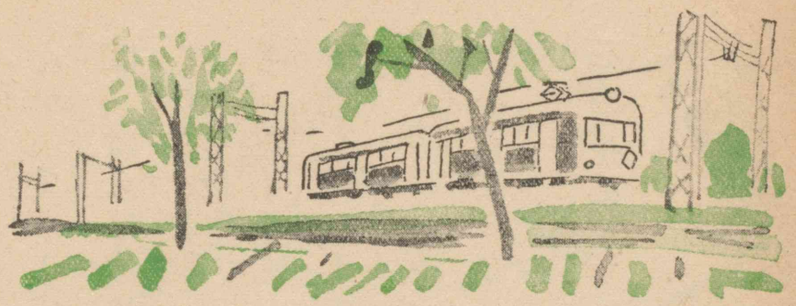


名前をしらべています。そうして、そのえをたくさんかいています。やんま、いととんぼ、みやまとんぼ、はらびろとんぼ、ちょうとんぼ、つのとんぼ、うすばかげろうなどのほかに、名前のわからないのも、たくさんかきました。こんど学校へ行く日に、持っていきますからおしえてください。ではお元気で。さようなら。

七月三十日

きよし

石田先生



## 6 動物園

きのうの雨で、畑や庭の木や草が、いきをふきかえしたように元気になった。ときどき、すずしい風が、へやの中を通りすぎて気持がよい。

きょうは、おとうさんとぼくと妹と三人で、町へ行くことになった。こうがい電車はたいへん早く、まどからすずしい風がはいってくる。

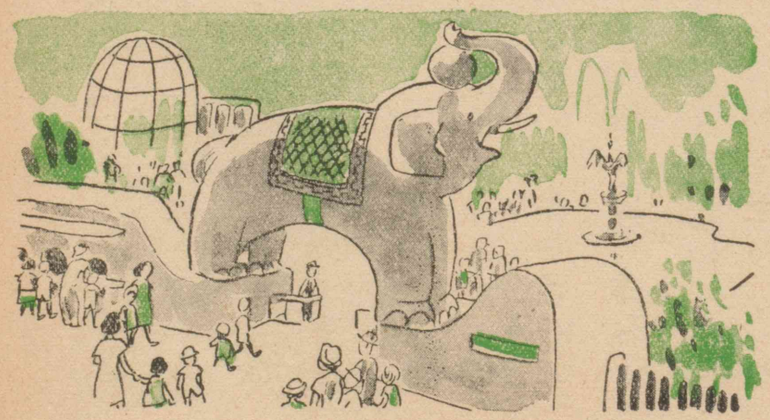
町で買い物をしたあと、動物園へ行った。



入口の門は、ぞうが長い鼻で、まりをさしあげている形になっている。そのぞうの太い足の下をくぐって、動物園にはいった。

はいったところは、ふん水になっている。高くあがったふん水の水が、わかれておちてくると、そのへんににじがかかる。池の中には、ひごいやまごいが、たくさんおよいでいる。

小鳥の国へ行ってみると、おうむのいるところには、子どもたちが集



まって、くちぐちに、おうむに話しかけている。妹が、「こんにちは。」というと、おうむも「こんにちは。」という。おもしろがって「ばか。」という、おうむも、「ばか。」とこたえる。おとうさんが、妹に、「きたないことばでいうと、おうむにまでばかにされるよ。」とおっしゃった。

さるの国へ行った時だった。さるのかわいい赤ちゃんがよちよちとやってきた。妹がキャラメルのはこを、赤ちゃんのさるの方へ出すと、横から親ざるがやってきて、そのはこを取ってしまった。



はこの中には、キャラメルがまだのこっていたので、妹はなきだしそうな顔になった。キャラメルをたべはじめた親ざるは、あめが、はについたので、あわててはきだそうとしたが、なかなか取れない。キャッ、キャッとなきながら、やっと右手で取りだした。こんどは、そのあめが右手にひっついてしまった。はらいおとそうとしたが、それも取れない。右手をきかんにふりはじめた。手がせなかにあたったかと思うと、キャラメルは、そのまませなかについてしまった。さるはあめが取れたと思ったの

か、安心したような顔つきで、キャラメルをせなかにつけたまま、にげてしまった。みんなが、おかしがって大わらいをしたので、妹もつられてにっこりした。

さるの国から少し行くと、大きなたてものの前に出た。そこには黒山のような人が集まっていた。

しばらくすると、へやの中から、ぞうが長い鼻をぶらぶらふりながら、ぞう使といっしょに出てきた。

ぼくは、まだほんとうのぞうを見たことがないので、めずらしかった。ぞう使のおじさんの話では、まだ子どものぞうだぞうである。ぞうは子どもの時から、あんなに大きいのだから、たいしたものだと思った。たてものの前の立



てふだには、

このぞうは、インドで生まれました。名前は日本名で夏子さんといいます。インドの国のおくりものです。

と書いてあった。やがて、ぞう使のおじさんがあいずをすると、ぞうは太い足をきちんとそろえた。前足をまげたかと思うと、後足で立ちあがった。次には、高いたなの上のまりを、長い鼻にまきつけて下におろした。こんどは、まりを鼻の先にのせ、それを、頭の上にさしあげて歩きまわった。見

ていた人たちは、思わず手をたたいた。

ちょうどおひるになったので、おべんとうにすることにした。

おとうさんは、思いだしたようにして、ぼくたちを動物園のじむ室につれていかれた。じむ室には、おとうさんの中学校友だちの小山さんがいらっしゃった。ぼくたちは、おちゃをいただきながら、おべんとうをたべた。

おべんとうのあとで、小山さんから動物園の話をいろいろとしていただいた。中でも、「ぞうの話」のげんとうは、たいへんおもしろくて、ためになったと思った。



## (三) ぞうの話 (げんとうのせつめい)

### 1

今、りくの上にすんでいる動物の中で、一ばん大きな動物は、なんといってもぞうです。ぞうは、牛の六ばいぐらいもあるそうです。中には、身長三メートル、体重四千五百キログラムという大きなものもいるということです。

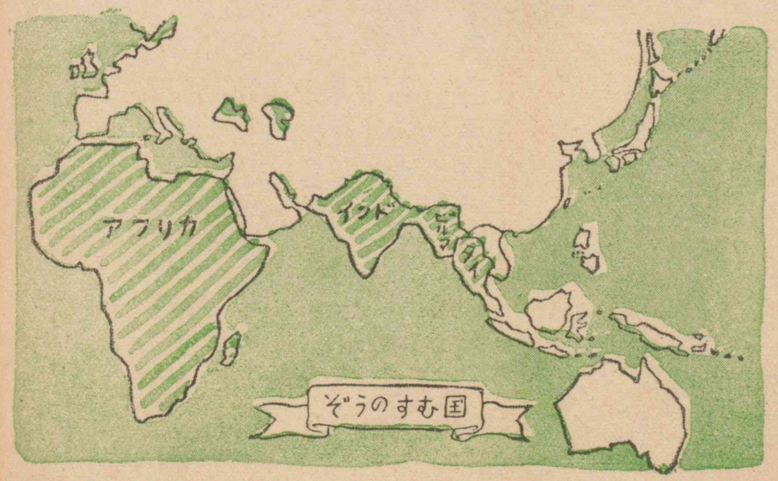
### 2

今では、ぞうは、アフリカやインドやタイやその近くの暑い国にすんでいます。日本でも、ずっと大むかし、外国

と土地がつづいていたといわれるころは、大きなぞうが、のそりのそり歩きまわっていたにちがいないといわれています。今でも、土の中から、そのきばや、はや、ほねが出てくるそうです。

3

ぞうは、いつも二十頭から百頭ほどかたまって、ジャングルの中を歩きまわっています。そうして木の芽や、根や、葉をたべてくら






していています。

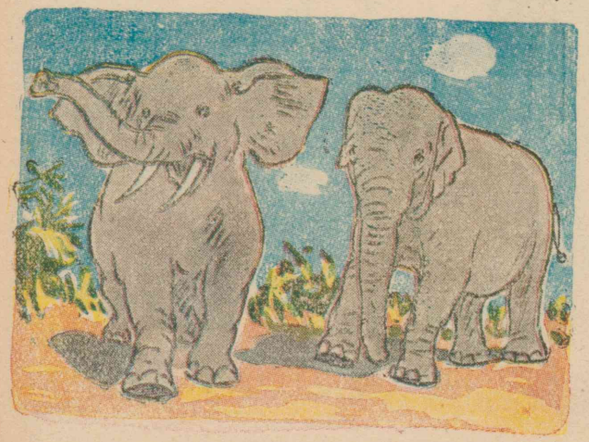
4

ぞうは、おく深い山や森にすんでいます。暑いものですから、川や、ぬまで水あそびをすることがすきです。長い鼻で水をすいこんで、その水をからだ中にふりかけたりします。およぎもたいへんじょうずです。川のそこに足をつけて、もぐったり、しずんだり、ういたりして川をわたります。水が深くなって、からだがしずんでしまっても、鼻の先を水の上に出していきをしますから、平気でわたっていきます。

## 5

アフリカの森や山にすんでいるぞうは、あらっぽくて、ライオンやとらなどと、ものすごいたたかいをすることがあります。そうして、あの重い足で、てきをふみつけます。それには、強いてきもかないません。

アフリカぞうは、インドぞうより、からだも、耳も、きばも大きくて、頭の上がまるく、せなかがくぼんでいます。インドぞうはそのはんたいです。

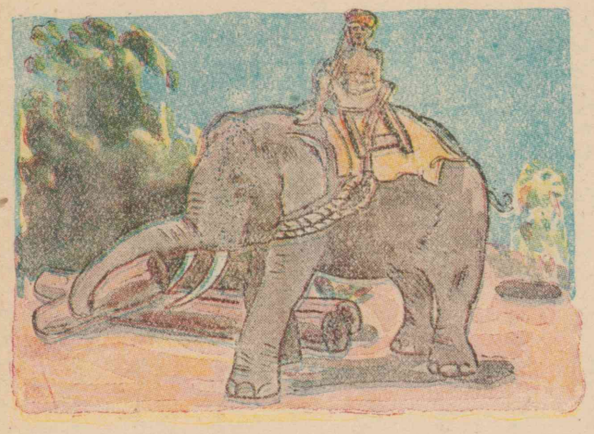




## 6

インドぞうは、よく人になれ、かしこくて物をよくおぼえるので、むかしから人にかわいがられてかわれます。それに、力がたいへん強いので、いろいろと役にたつしごとをします。インド、タイなどの国では、牛や、馬と同じように、なくてはならないたいせつな動物になっています。

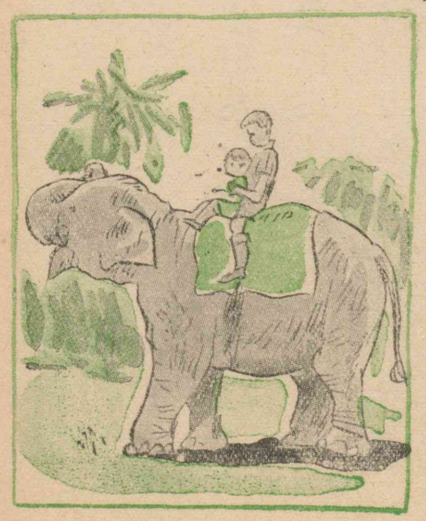
重い荷物を運んだり、ひっぱったりするのに使われます。太い木でもかるがると鼻でまきあげます。



## 7

よくならされたぞうは、また、人をせなかにのせて運びます。人をのせる時は、前足をまげて頭をさげ、耳を持たせてせなかへのせます。

ぞうは子どもが大すきです。子もりをするのもじょうずです。ないている赤ちゃんでも、ぞうが鼻でまきあげて、ひょいとせなかにのせますと、赤ちゃんはなきやんで、ぞうのせなかのゆりかごの中で、にっこりとわらいます。





## 8

ぞうは、げいをすることがじょうずです。動物園やサーカスのぞうは、いろいろなげいをします。

小さないすにこしをおろしたり、その上に立ったりします。まりなげもします。たいこのようなまるい物の上にあがって、それをころころまわし、からだのちょうしをとりながら、進むことができます。さかだちもします。口にラッパをくわえ、鼻でぼうを持って、たいこをたたき、ブウブウドンドンとやります。

9

ぞうの鼻は手のはたらきをします。ぞうは首がみじかいかわりに、鼻が長いので、鼻を使って、たべ物を口へ運びます。

鼻の先には、二つのあながあって、そのとがっているところは、物を感じる力がするどく、また、きように動くので、はりのような小さい物でも拾うことができます。

鼻で魚つりのさおを持って、魚つりもします。うきを、あのかわいい小さな目でじっと見つめ、うきがぴくぴくすると、さおをあげて、魚をつりあげます。



## 五　私のけいこ

### 一　長いお話

長いお話の文は、どんなによんでしらべたらいいでしょう。

○「花びらのたび」を、よくよんで、お話のすじをしらべてごらんなさい。さくらの花びらは、川をくだりながら、いろいろな水の音を聞いたり、いろいろなものを見たりしました。

・さくらの花びらは、どこから、どんなところをとおり、どこまで行ったのか、ノートに、じゅんじゅん

にかいてみましょう。

○ かけた話のすじを、友だちに話しましょう。

○「花びらのたび」の紙しばいを作りましょう。

## 二 かたかなのことば

わたくしたちのかく字には、ひらがな、かたかな、かん字、ローマ字などがあります。そのうち、かたかなでかくことばには、どんなものがあるでしょう。

○「花びらのたび」のところでは、水の音は、どんな字でかいてありますか。

ジャブジャブ、コボコボ



○水は、このほかにどんな音をたてますか。いろいろな音を、かたかなでかきましょう。

○つぎのようなことばも、かたかなで、はっきりとかきましょう。

よそのくにの人の名前　　よそのくにの名

よそのくにからきたことば　　いろいろなもの音

とりや、虫や、けだもののなき声

○しっている、とりや、虫や、けだもののなき声をあつめてかきましょう。

○よそのくにの、くにの名や人の名前や、ことばをしっているだけかいてごらんなさい。

## 三　たいせつなお話

先生が、

「これは、たいせつなお話だから、ノートのはしにかいておきなさい。」

とおっしゃいました。

「あさって、ごご一時から、みなさんのおうちの人と、先生とのお話の会をひらきます。おうちの人に、だれでもよろしいから、ぜひ、きてもらってください。なにかかくちょうめんと、えんぴつとをわすれないように持ってきてください。」



きよしくんは、先生がおっしゃるとおりには、とてもかけませんので、たいせつなことだけを、つぎのようにかきとめました。

あさって　ごご一時　うちの人と先生とのお話　だれでもよい　ぜひくる　ちょうめん　えんぴつ

○あなたでしたら、この先生のお話で、たいせつなところを、どんなにかきますか、かいてごらんなさい。

○きいたりよんだりする話の中で、たいせつだと思うことをかくようにしましょう。

## 四　読んだことをまとめる

本を読んだら、そのあと、どんなことが書いてあったかを、まとめて話したり、書いたりすることがたいせつです。

○まとめかた

いつ　どこで　だれが　なにを　どんなにしたか
いつ　どこで　だれが　どうして　どうなったか

・一、二、三……のばんごうをつけて、書いてあることを、じゅんにみじかく書きならべる。

・見やすいように、『ひょう』に書く

・だいじなことばを、じゅんに書きならべる。



○「ヨットを作る」「学校のおじさん」「大そうじ」を読んで、中に書いてあることを、まとめて書きましょう。

その話もしてごらんなさい。

○聞いたお話を、まとめてみましょう。

校長先生や先生のお話　友だちとの話しあい
ラジオの話　げきやえいがの話　家の人の話

## 五

「。」「、」

もし、私たちの文に、「。」や「、」がなかったら、どんなにわかりにくいことでしょう。

文の中で、ひとまとまりの話がおわったら、そこに「。」

をつけます。また、ひとまとまりの話の中で、いみのきれめにきたら、そこに「、」をうちます。「。」や「、」で、いきをつぎながら読むと、読みやすくなります。

○本の中にある、どの文でもいいから、それを「。」「、」のない文に、書きなおしてごらんなさい。

○「。」「、」のない文に、こんどは「。」「、」をつけるけいこを、じぶんでやってみましょう。

○「。」「、」がついたら、本の文とくらべましょう。

○文を書く時には、「。」「、」を、はっきりうつようにしましょう。



## 六　手紙を書く

手紙は、たいへんべんりなものです。とおくはなれている人たちと、お話ができるし、だれとでもなかよしになれるのですから。

○あいての人をきめて手紙を書くことにしましょう。

・その手紙で、あいての人に、どんなことをたずねたいと思いますか。

・どんなことを、知らせたいと思いますか。

・どんなへんじを書きますか。

○あて名は、ただしく、きれいに書きましょう。

## あたらしいことば


あいず……105
あおぐ……16
あずかって……82
アフリカ……110
あまり……29
あまがえる……77
あらっぽくて……110
ありのまま……88
いきおい……12
いけがき……38
いけん……47
いす……113
いどころ……83
いぬかき……97
いれかえ……48
インド……105
うき……114
うしなって……59
うすばかげろう……99
うちつけ……85
うなって……15
えいがかん……86
えんそく……53
エナメル……31
えんちょう……89
おうむ……101
おく……39
おくりもの……105
おしいれ……55
おどかした……84
おばな……98
おも(なこと)……43
おもい……30
おもいつかれた……38
おもり……30
おれめ……26
か……57
かいかた……40
かいすいぎ……91
かいちゅうでんとう……84
かくと……95
かえった……69
かおり……21
かかり……46
かかり(ました)……27
(さん)かく……28
がくえん……87
がくしゅう……48
かじ……29
かしこくて……111
かして……31
かずかに……16
かたむいて……26
がっきゅう……43
かび……51
かふん……98
かぼちゃ……98
かわいがって……37
かわいそう……62
かわいた……31
かわかし……50
かわかみ……10
かわしも……7
かんじる……114
かんてん……69
かんぱん……25
きずいた……4
きたない……102
きば……108
きもち……9
きりぐち……25
キャラメル……102
きょう……114
きれはし……30
きろく……48
キログラム……107
きんぎょ……37
くうき……52
くじいて……63





(かみ)くず……41
くだ……12
くびわ……91
くふう……26
くぼんで……110
くらして……111
くろやま(のよう)……104
げい……113
けいかく……80
けいさつ……88
けいじばん……47
げすい……56
げんとう……107
ごう……31
こうがい(でんしゃ)……100
こうもん……37
こがたな……29
ごご……54
こする……77
ごぜん……80
こづかいさん……34
こっけい……77
こな……54
ごみ……59
こもり……112
さかだち……113
さぎょうふく……49
さしず……50
さんせい……90
しかたなく……88
しごと……48
しぬ……50
しまつ……48
じむしつ……106
しゃがみこみ……57
じゃれ(はじめました)……53
ジャングル……108
しょうじき……90
しょげた……52
しらべて……52
しん……98
しんせつ……90
しんちょう……111
ず……23
すいでん……70
すいよう……72
すう……62
すえて……38
すきま……11
すくい……71
あとずさり……91
すじがき……86
(ゆう)すずみ……81
すみか……59
せいとん……48
せいまいしょ……39
せきにん……82
せきゆうにゅうざい……56
せきりきん……62
せつめい……107
せまく……74
セメント……37
ぞう……37
ぞうきんがけ……45
そうじ……35
そびえて……36
そめ(ました)……20
そめもの……20
タイ……107
たいこ……113
たいした……104
たいじゅう……107
たいせつ……63
たいそう……34
たきぎ……25
たたえて……37
たたかい……110
たたみ……51
たてふだ……105
たね……38
たまご……65

ダム……15
たらい……30
ち……62
チフスきん……62
ちょうし……96
ちゅうがっこう……106
つきやま……36
つつみ……4
つまり(そう)……60
ておち……46
てき……110
でこぼこ……27
てらして……84
とう……108
とがって……114
とがらした……25
としより……34
どち……108
とつぜん……13
とても……14
とまって……11
とら……110
とんぼ……99
なぐさめる……42
なみうちぎわ……96
なえき……5
なみだ……11
にごった……71
にじ……101
にのみやきんじろう……37
ぬすんで……88
ぬの……20
ぬま……109
ねっしん……69
ねつびょう……63
ねむ(のき)……78
は……108
(いち)ばい……87
ばいきん……50
はえ……57
ばか……87
はしゃぎ(ました)……21
はだし……91
はなびら……6
はんたい……110
ばんにん……88
ひごい……101
びっこ……58
ひとりぼっち……86
ひま……41
ひるね……81
ふいに……12
ふくれて……77
ふとん……55
ふんすい……101
べんきょう……39
べんじょ……43
ほ……22
ぼうふら……62
ほこり……54
ほす……50
ほね……108
ほんの……11
ポンプ……12
まごい……101
マスク……49
まとめて……46
マラリア……62
みだれる……45
(おお)むかし……107
むずかしい……28
(きの)め……108





(にっぽん)めい……105
めばな……98
めまい……13
もくよう……69
ものすごい……110
やくにたつ……19
やど……11
やとわれて……87
ゆだん……59
ゆりかご……112
ゆるして……88
よごれ……11
ヨット……22
よつばい……83
りく……92
りはってん……87
れいすいまさつ……80
わりに……87


## かん字


通 とおる 7
時 とき 9
持 もち 9
岩 いわ 10
畑 はたけ 10
間 あいだ 11
友 とも 11
休 やすむ 12
強 つよい 12
暗 くらい 12
発 はつ 15
電 でん 15
所 しょ 15
岸 きし 16
波 なみ 17
役 やく 19
広 ひろい 19
工 こう 20
場 じょう 20
黄 き 21
切 きる 22
考 かんがえる 23
行 いく 23
半 はん 25
形 かたち 25
左 ひだり 25
同 おなじ 25
両 りょう 26
横 よこ 27
角 かく 28
板 いた 29
号 ごう 31
買 かう 31
顔 かお 34
使 つかう 34
運 うん 35
動 どう 35
夏 なつ 35
冬 ふゆ 36
魚 ぎょ 37
宮 みや 37
次 じ 37
郎 ろう 37
屋 や 38
勉 べん 39
組 くみ 40
聞 きく 40
売 うる 41
男 おとこ 41
来 くる 42
庭 にわ 32

頭 あたま 42
会 かい 43
級 きゅう 43
記 き 43
書 かく 46
係 かかり 47
集 あつまる 47
知 しる 47
習 しゅう 48
妹 いもうと 49
台 だい 50
具 ぐ 50
重 おもい 51
午 ご 54
後 ご 54
色 いろ 57
馬 うま 59
急 きゅう 59
苦 くるしい 61
病 びょう 63
力 ちから 63
面 めん 64
細 ほそい 68
黒 くろい 68
弟 おとうと 72
夕 ゆう 81
園 えん 87
首 くび 91
進 すすむ 95
遠 とおい 96
実 み 98
物 ぶつ 100
鳥 とり 101
国 くに 101
鼻 はな 104
身 しん 107
体 たい 107
芽 め 108
深 ふかい 109
平 へい 109
荷 に 111
動 うごく 63
田 でん 70
後 うしろ 75
時 じ 80
海 かい 91
物 もの 100
長 ちょう 107
重 じゅう 107
外 がい 107
国 こく 108
頭 とう 108
物 もつ 111
魚 うお 114
下 しも 7
上 かみ 10
船 せん 22
小 こ 38
米 まい 39
強 きょう 39
中 ちゅう 41
板 ばん 47
所 ところ 50
道 どう 50
出 だす 50
間 げん 59
運 はこぶ 62


読みかえ



既成の作品から引用したものは次の通りであります。

かえるのうた　室生犀星


編者
監修　奈良女子高等師範学校教授　重松鷹泰
同　附属小学校主事
編修・執筆　奈良女子高等師範学校教諭　今井鑑三
同　笹倉美好
同　浜真喜男
挿画　田川寛一
下高原龍己

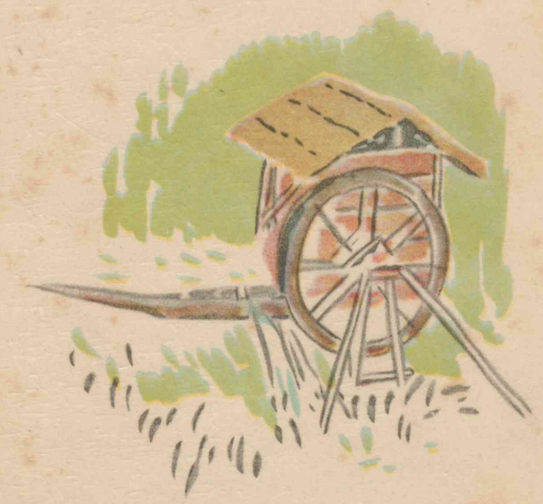
ねむの木　小学国語　三年上（小学校国語科第三学年前期用）

昭和二十六年　月　日印刷
昭和二十六年　月　日発行
（昭和二十五年八月十二日　文部省検定済）

小国　329

著作者　大阪書籍国語編修委員会　代表者　重松鷹泰
発行者　大阪市西成区津守町東二丁目五二番地　大阪書籍株式会社　代表者　松村九兵衛
印刷者　大阪市西成区津守町東二丁目五二番地　大阪書籍株式会社　代表者　松村九兵衛
発行所　大阪市西成区津守町東二丁目五二番地　大阪書籍株式会社

定価　金　円



広島大学図書
0130449962

文庫
50
962

大阪書籍株式会社